

# 維新史 回廊だより

第1号  
平成18年  
(2006年)  
9月発行  
(年4回発行)

発行所 山口県環境生活部文化振興課

山口県山口市滝町一番一号 電話〇八三一九三三二二六二七

## ◆創刊のことば◆

山口県では、ふるさとの歴史を明日に伝え、資料や史跡等の文化資源を活用して新しい地域文化を創造することを目的に、平成八年度から、「維新史回廊構想」の推進に取り組んでいます。

この事業の一環として、明治維新発祥の地といわれる山口県の各地にある様々な明治維新関連の情報を県民の皆さんにわかりやすくご紹介するため、この度「維新史回廊だより」を創刊しました。

記念すべき創刊号は、山口県文書館の収蔵資料の中から、吉田松陰像（自賛）をご紹介します。

維新史回廊だよりでは、今後も、年四回の予定で、県民の皆さんに「明治維新」に関わる様々な情報を提供していきたいと考えておりますので、末永くご愛読いただきますようお願い申し上げます。

## ◆収蔵資料探訪（山口県文書館）◆

吉田松陰像（自賛）〔吉田家本〕

絹本着色 掛幅装 箱入 縦九九・一cm、横三五・八cm  
作成 安政六年五月中旬



※ 解説は、山口県文書館の山田稔専門研究員にお願いしました。

## ○この資料が文書館に収蔵された経緯を教えてください。

山口県文書館は、山口県の公文書及び記録並びに県内に関する文書及び記録（以下「文書」という。）を永久保存して、一般の人々の利用に供するため、昭和三十四年（一九五九年）に日本で最初の文書館として誕生しました。

文書館には、江戸時代の藩政に関する文書、明治以降の山口県の行政に関する文書、県内の諸家、企業、団体、個人が保管してきた文書など、寄託されたものを含めて約四十四万点の文書が収蔵されています。

この吉田松陰像（自賛）は、昭和二十九年（一九五四年）四月、東京都在住の吉田茂子さんから山口県に寄贈されたものです。茂子さんは、吉田松陰から三代後の吉田家当主・庫三氏の妻にあたる方で、寄贈された資料は、当初、県立山口図書館に収蔵されましたが、昭和三十四年の山口県文書館開設に伴い、当館へ移管されました。

## ○吉田松陰像（自賛）はいつ頃作られたものですか。

安政六年（一八五九年）五月、萩の野山獄に入獄中の松陰に幕府から江戸送りの命が下されました。その年の十月に江戸伝馬町で処刑されましたので、この後、松陰が生きて萩の地を踏むことはありませんでした。

この吉田松陰像は、最期の旅立ちを前に、松陰門下の松浦松洞<sup>しょうどう</sup>が描いた師の肖像に、門下生達の求めに応じて、松陰が自賛<sup>じさん</sup>したものです。

※1 松浦松洞（一八三七～一八六二）萩松本の商人の家に生まれる。通称亀太郎、名は知新、字は無窮・温古。松洞と号した。幼時から絵を好み、「はざま」\*西涯に四条派を学び、のち小田海僊に師事した。松陰の教えを受け、尊皇愛国の人となり、風教のため忠孝礼儀の人物を精力的に描いた。（\*右へんに間）

※2 自賛：自分が描いた画（この場合は、自分が描かれた画）に題して、自分で詩・歌・文などを添え書くこと。

○どのような経緯で作られたのでしょうか。

本像作成の経緯は、松陰自身が次のように書き残しています。「十六日、朝、肖像の自賛を作る。像は松洞の写す所、之に賛するは士毅の言に従ふなり」（『東行前日記』、大衆版『吉田松陰全集』第九卷）。つまり、賛文を作ったのは安政六年五月十六日の朝、肖像を描いたのは松浦松洞で、小田村伊之助（士毅、楯取素彦、松陰妹婿）の勧めに従い松陰が賛を入れたことがわかります。また、跋文<sup>はつぷん</sup>は翌十七日に作っています（『東行前日記』）。自賛の松陰像は、門下生達の求めもあつて複数作られたようです。賛文は、各本ともほぼ同文ですが、跋文は書き与えた相手に応じて異なっています。

※3 跋文：書画の末尾に添える文。あとがき。

○松浦松洞は、松陰の肖像をどのようにして描いたのでしょうか。

本像の成立に関する研究に、広瀬豊著『吉田松陰の研究』（昭和十八年（一九四三年））があります。同著では、肖像は野山獄入獄前から描かれていたものがあつたとされています。その根拠として、門人平野清実の談話に「松浦松洞が先生の肖像をかきし時は、其顔を似せるに苦心し、幾度もかきて先生に見せたり、先生は鏡を以て之に照して批評せられ、像遂に成る、元来松洞が先生の像をかき始めたは、先生東行の頃より二、三年前にて、村塾にてかきたるなり、かねてより、身の行末を慮<sup>おもんばか</sup>られたるなり、松洞のかきしは、余その現場を見たるなり」（『関係雑纂』、定本『吉田松陰全集』第十卷）とあることや、また、安政五年（一八五八年）暮に入獄する際に、入江杉蔵から「子の面目復た見るべきこと難し。子の面目を見るべきものは、其れ唯だ文辞か。願わくは為めに一言を留められんことを」と願われ、「予戯れに之を拒みて云はく、『吾れ画を善くせず、画を善くする者は松洞生なり。向に余の面目を写せり。面目見るべし、何ぞ文辞を必とせん』と。」（『松陰詩稿』、大衆版『吉田松陰全集』第六卷）と答えていることなどがあげられています。

一方、『東行前日記』安政六年五月二十一日条に、4つの跋文が記されていますが、その一つに「我が友無窮（松浦松洞）は画家にして、（中略）、今吾れ將に往かんとするや、復た獄に來りて吾を貌す。吾れ果たして終りを善くせば、此の像當に清狂と并せ伝ふべし。此の像連作数本あり、此れ

其の家蔵に係る」とあります。

これらのことから、肖像は安政三、四年頃から松浦松洞が描いており、江戸送り直前に野山獄の松陰を訪ねて描いた場合もあつたとみられます。また、その出来映えは、松陰自身も認めるものであつたことがうかがえます。

○松陰は、この像のような顔立ちだったのでしょうか。



松陰の

風貌としては、「松陰筋骨逞しからざれども、修幹瘦軀、亭然として長し。少時騎を習ひ、また劍を学びしが、共にその妙に至らず。これ文中屢々<sup>しばしば</sup>割鶏の力なしと称

する所以か、顔やや長く、隆準にして、白面に痘痕を帯ぶ。一見威風の人を襲ふものなし。ただ眼光の爛々として他を射るのみ」（『筋骨逞しくはないが、やせてすらつとしてい。面長で鼻が高く、色白の顔に天然痘の痕がある。一見威圧感はないが目は爛々と鋭く輝いている。』との記述があります（『広瀬豊著『吉田松陰の研究』。ちなみに、弟杉敏三郎の容貌が最も松陰と似ていたと言われています。また、松陰が江戸へ出立する前日、



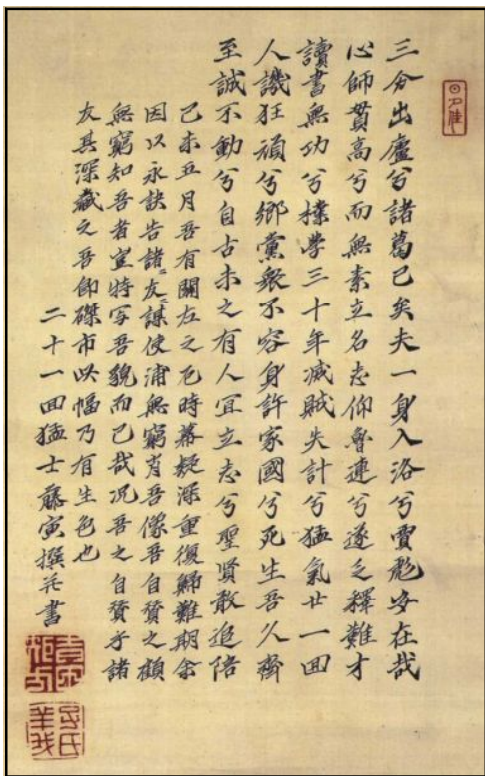
久坂玄瑞は密かに獄中の松陰を見たようで、その状況を高杉晋作宛の書状で「僕竊見先生於獄、瘦骨嶮崢、髮乱被面、死生危險之際、怡然処之無有難色」（吉田松陰関係資料No.201、妻木忠太著『久坂玄瑞遺文集』上）と記しています。現存する肖像は、前述のような松陰の風貌をよく表していると思われませんが、身だしなみはいずれも整然としており、険しく刺々しく、髪が乱れて顔を覆うといった獄中の姿そのままを描いたものではないと考えられます。

### ○松陰の自賛肖像はいくつ作られたのですか。

諸説ありますが、定本『吉田松陰全集』によると、松陰が自賛したものは全部で8幅あり、このうち「自賛肖像」は、①吉田家本、②萩松陰神社（杉家）本、③品川本、④久坂本、⑤岡部本、⑥中谷本の計6幅、「自賛のみ」で、肖像を伴わないものが①福川本、②松浦本の計2幅とされています（松浦本は後に人をして肖像を描かせたといわれています。所在不明）。

### ○「吉田家本」の特徴はどのようなものですか。

各本の中では唯一のあぐらをかいて座った像であり、羽織をまとわず、刀は左脇に置いて、やや寛いだ姿勢をとっています。紺色の着物が画面に締まりを与え、賛文の整然さと相俟ってバランスの良い自賛肖像となっています。



三命出處皆爲己矣夫一身入浴兮費彪安在哉  
心師貫高兮而無素立名志仰魯連兮遂之釋難才  
讀書無功兮擇孝三十年滅賊失計兮猛氣世一回  
人識狂禿兮鄉黨衆不容身許家國兮死生吾久齋  
至誠不動兮自古未之有人宜立志兮聖賢教追倍  
己未五月吾有闕左之厄時暮擬深重復歸難期余  
因以永訣告諸友謀使浦無窮首吾像吾自贊之願  
無窮知吾者望特寫吾貌而已哉况吾之自贊予諸  
友其深藏之吾即襟市以幅乃有生色也  
二十一回猛士藤宮撰并書

### ○文章には、どのようなことが書いてあるのですか。

賛文及び跋文の大体の意味は、次のとおりです。なお、それぞれの読み下し文については、山口県庁の維新史回廊ホームページ(<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/gyosei/bunka-s/ishin/index.html>)をご覧ください。

#### 賛文大意

私が尊敬する諸葛孔明や賈彪はもうこの世におらず、範としていた貫高や魯仲連のような功績を残す力もなかった。こうした先賢の書を読み、国賊を滅ぼそうとしたが果たせなかった。故郷の人は私を非難するが、私は、国のために命を投げ出す覚悟はできている。誠意を尽くせば、心を動かさない人は古来一人もいないと言われているが、人は、是非とも高い志を立てるべきであり、（困難な状況でも）聖賢の志を私も敢えて追い求めたい。

#### 跋文大意

安政六年五月、私は江戸に送られるが、二度と帰って来られないと思い、周りの人々に最期の別れを告げた。人々は、松浦松洞に私の絵を描かせ、私に言葉を添えることを求めた。私をよく知る松洞は、この絵に外見だけを写そうとしたのではない。ましてや私が言葉を添えるのだから。人々よ、この絵を末永く保管して欲しい。もし私が処刑されても、この絵の中に私は生きているのだ。

山口県文書館では、収蔵する文書のうち目録に記載されているものについては閲覧ができますし、閲覧室では、月替わりで小展示も行っていますので、お気軽にご利用いただきたいとのことです。

また、毎年開催されている文書館デイズ（今年は十一月十日〜十二日）では、書庫の見学ツアーや特別資料展示等が行われています（無料）。普段見ることのできない書庫の内部や貴重な文書等が観覧できますので、この機会に、是非、文書館に行ってみてはいかがでしょうか（詳しくはホームページをご覧ください）。

なお、今回ご紹介した「吉田松陰像（自賛）」の画像は、文書館のホームページからダウンロードできます。

## 山口県文書館のご案内

所在地 山口市後河原一五〇一（県立山口図書館と同じ建物）

電話 〇八三一九二四二二一六

開館時間 九時から十七時まで

休館日 日曜日、祝日、月末整理日、年末年始、春秋資料整理期間

（十月八日（日）から日曜開館、月曜休館に変更予定）

ホームページ <http://ymonjo.yasn21.jp/>

## ◆企画展等情報◆

### ▼山口県立山口博物館（山口市春日町八一） 電話〇八三一九二二〇二九四

歴史常設展示第2期 和漢書の世界展

（平成十八年七月八日～十二月二十七日）

江戸時代から明治初期にかけて出版されたさまざまな書籍を紹介  
します。

観覧料は常設展観覧料（一般百三十円、学生八十円）に含まれます。

十月二十四日～十一月二十一日の間は、山口博物館所蔵名品展開  
催のため休止します。

### ▼山口県立山口図書館（山口市後河原一五〇一） 電話〇八三一九二四二二一一

月間資料展示 長州ファイブ（平成十八年八月一日～九月二十八日）

海外渡航が禁じられていた幕末期、英国に密航した長州藩士五名  
は、帰国後明治維新の原動力となり、日本の行政、産業等の各分野  
で重要な役割を果たし、近代日本の基礎を築きました。

今年、山口大学で長州五傑の記念碑が建てられ、また、「長州フ  
アイブ」の映画が製作されるなど、県内では改めて彼らを顕彰する  
気運が高まっています。

国民文化祭が山口県で開催されるこの機に、若き長州人たちの軌  
跡とその偉業を図書資料とパネルで振り返ります。

観覧料は無料です。

## ◆お知らせ◆

### ▼維新史出前講座の開催について

山口県では、今年度、明治維新时期に起こった重要な事件や維新を支  
えた人物等をわかりやすく解説し、明治維新をより深く理解してい  
たため、「維新史出前講座」を実施することとしています。

出前講座は、引受先となる団体に参加者や開催場所の確保をしてい  
ただき、県が講師を派遣する事業です。

現在、引受先を募集しています。対象は、中・高等学校や公民館、  
図書館、資料館等及びそこで活動する団体で、詳しくは、県文化振興  
課（〇八三一九三三二二六二七）又はお近くの市町文化振興担当課に  
お問い合わせください。

### ▼第二十一回国民文化祭・やまぐち2006の開催について

平成十八年十一月三日（金）から十二日（日）までの十日間、山口  
県内の各地で、「やまぐち発 心ときめく文化維新」をテーマに「第  
二十一回国民文化祭・やまぐち2006」が開催されます。

各事業会場の入場には、入場整理券（無料）や入場券（有料）が必  
要なものがあり、現在、各事業の実行委員会等で入場整理券の応募や  
入場券の販売を行っています。入場整理券の応募締切は九月二十日と  
なっています（開会式・オープニングフェスティバルと閉会式・グラ  
ンドフィナーレの応募は締め切りしました）。

五十年に一度のこのチャンスに、ぜひ皆さんも国民文化祭やまぐち  
に参加して、文化の秋を体感してください。応募先や料金等詳しくは、  
県庁、市町、文化施設などに置いてある「第二十一回国民文化祭・や  
まぐち2006ガイドブック」（無料）をご覧ください。

（問合せ先：第二十一回国民文化祭山口県実行委員会事務局（〇八三一九三三二二八五〇））

「あとがき」創刊号の維新史回廊だよりはいかがでしたか。これからも、あ  
まり知られていない維新にまつわるエピソードなどを交えてお届けしたいと  
考えています。ご意見・ご感想などがありましたら、山口県文化振興課文化  
環境班までお寄せください。次号は、十一月発行の予定です。